

英米文化学会会報 第24号



SES NEWSLETTER

No. 24

D

英米文化学会第13回大会のお知らせ

標記の大会を下記の要領で開催します。

- ◆開催年月日：平成7年9月2日（土）
- ◆場 所：文京女子短期大学 スカイホール 文京区向丘1-19-1 電話 3814-1661
- ◆時 間：9:00-17:00
- ◆講 演：元日本アメリカ文学会会長 志村正雄 先生（鶴見大学）

演題：Wendell Berry について

Wendell Berry の紹介記事を名和会長がお寄せくださいましたのでご覧ください。

☆Wendell Berry☆

Poet, novelist, and essayist, Wendell Berry(1934-), a native Kentuckian, returned to a family farm in the northern Kentucky hills after several years in New York City. His move to the rural south has had a strong influence on his writing as he seeks to characterize the relationship between human values and the processes of nature. His novel, *The Memory of Old Jack*, recounts one day in the life of a ninety-two-year-old farmer who is remembering and coming to terms with his life as a boy, husband, lover, farmer, father, and friend.

研究発表 9:40-15:15

1. *Jude the Obscure*に関する一考察

— 'The letter killeth' を中心に —

北村 桂子（共立女子大）

司会 高橋 祐子（文教学園）

2. 森としてのシェイクスピア礼賛

— キーツに至るまで —

小林 正弘（拓殖大）

司会 高山 信雄（大正大）

3. 第二言語習得における意識的学習の効用

小林多佳子（昭和女子短大）

司会 亀山 孝（共愛学園）

4. アトランタのボール

— ジョン・ダンとジョージ・ハーバート —

山根 正弘（創価大）

司会 大西 章夫（中央大）

5. エマソンのイギリス講演

高梨 良夫（長野県短大）

司会 大東 俊一（法政大）

6. D. H. ロレンス：ニュー・メキシコからの手紙

須田 理恵（日大）

佐藤 治夫（日大）

相良 英明（鶴見大）

司会 五味田幸夫（玉川大）

◆第13回大会事務局：日本大学歯学部 佐藤英語研究室

〒101 千代田区神田駿河台1-8-13

TEL 03-3219-8160 (直通)

第13回大会研究発表レジメ

1. *Jude the Obscure*に関する一考察

— ‘The letter killeth’ を中心に —

北村 桂子

Jude the Obscure は、貧しい石工の青年と、主として結婚制度等の彼を取り巻く社会の既成概念との闘いを描いた小説だが、そのタイトルページに ‘The letter killeth’ というエピグラフがある。これは新約聖書コリント人への第二の手紙3・6からの引用であるが、本来はその後に続く ‘but the spirit giveth life’ と対をなす。これは「文字は（人を）殺し、霊は（人を）生かす」のように訳されることが多いが、ここでは前半部をもって完結している。

聖書における意味解釈は分れるところだろうが、この作品において ‘The letter killeth’ とは何か。本発表ではハーディが後半部を引用しなかったことをふまえ、 ‘The letter killeth’ を手掛かりにして、作品に一つの解釈を試みる。

2. 森としてのシェイクスピア礼賛

— キーツに至るまで —

小林 正弘

キーツは “On sitting down to read *King Lear* once again” と題するソネットの中で、シェイクスピアの悲劇の一つ *King Lear* を森に喩えている。彼はまたその多くの重要な詩の中で、ギリシア・ローマにまで遡る英詩の伝統に基づきつつ、森の持つ否定的・肯定的双方のイメージを効果的に用いていた。こうした事実は、キーツがシェイクスピアを詩人としての師と仰いでいたことを考えあわせてみると、一つの問題を提起する。彼はどのような意味においてシェイクスピアを森に喩えていたのか？

本発表では、この問題の解明に当たって、シェイクスピアを森に喩える伝統如何を出来るだけ遡って追跡した上で、キーツ独自の意味付けを検討してみるつもりである。

3. 第二言語習得における意識的学習の効用

小林多佳子

言語習得の分野で、無意識の習得 (unconscious acquisition) の重要性を説いた Krashen の理論は、批判も含めて、その後、言語教育に大きな影響を及ぼした。本発表では、まず Krashen 理論の柱となる「習得・学習の仮説」(The Acquisition-Learning Hypothesis) について考察する。Krashen によれば、第二言語習得には、子供が母国語を習得するように成人が第二言語を「習得」する acquisition と、意識的に言語を学ぶ「学習」、learning とがある。この理論では、意識的な学習がむしろ自然な習得を阻害するものと捉え、真のコミュニケーション能力は習得を通してのみ、身につくと主張する。

この Krashen の理論は、その後、その矛盾性が批判されたが、同時に自然で無理のない言語習得が一種の流行となったことも事実である。本発表では、日本の英語教育がおかれている状況から、意識的学習がむしろ成人の第二言語習得においては有用な役割を持つと言う立場を取り、考察を深めてゆく予定である。

4. アトランタのボール

— ジョン・ダンとジョージ・ハーバート —

山根 正弘

ジョージ・ハーバート (George Herbert) が先輩詩人ジョン・ダン (John Donne) に文学的な影響を直接、間接に受けたことはよく知られている。ハーバートの詩のここかしこにダンの声を聞くことができる。しかし両者の密接な関係にもかかわらず、二人の詩人が扱う詩の題材の相違から時にその声に気づかないことがある。今回はそれらのうち一つを取り上げ、比較検討したいと思う。即ち、ダンがエレジー “To his Mistress Going to Bed” で用いた神話モチーフ (アトランタのボール) をハーバートがいかにかに宗教詩 “The Pulley” に援用したかを解明することが、この発表の目的である。

5. エマソンのイギリス講演

高梨 良夫

エマソンは何よりも講演者として再出発し、当時の社会の現実と直接的に関わった詩人思想家であるとみ

なすことが出来る。彼の著作も主として講演の原稿を基にしてまとめられたものである。内的葛藤の末、ユニテリアン教会の牧師職を辞した彼は、より広い英米の地域の、主として農民、職工、商人、知的職業人といった当時興隆しつつあった middle class の市民に、new moral order を指し示す精神的指導者となつていったのである。エマソンの講演活動の主要な舞台はアメリカ国内であつたことは言うまでもないが、今回は彼のイギリスにおける講演活動について考察してみたい。エマソンは生涯に三度イギリスを訪れているが、特に 1847 年の二度目のイギリス旅行の際には、極めて精力的に各地を講演して廻っている。新大陸の思想家エマソンがイギリスでどのように受け入れられたのか、またエマソンの講演活動を支援したイギリス人等についても注目してみたい。

6. D. H. ロレンス：ニュー・メキシコからの手紙

須田 理恵

佐藤 治夫

相良 英明

D. H. ロレンスは、生涯にわたって夥しい数の手紙を書きつづけた作家である。現在残されているものだけでも、5000 通を超える手紙が書かれている。内容的には、日記がわりに書いていたのではないかと思えるものも多く、自己作品に関する言及も豊富であり、ロレンス研究には欠かすことのできない第一次資料となっている。更に、彼は手紙においても自己を、文学を語りつづけていて、手紙自体をロレンス文学の一部と考えることも可能である。この手紙を様々な角度から分析することは、ロレンス研究の上に更なる可能性を切り開くものである。

本発表では、彼の手紙を新大陸（主にニュー・メキシコ）から発送した手紙に制限した上で、コンピューター解析を試みた結果である。手紙をコンピューターによって解析するという研究方法自体が発展途上のものであり、まったく新しい試みなので、発表は中間報告的なものになるが、新たな研究方法の方向性と可能性を示すことができればと考えている。

速読用テキストの原稿再募集のお知らせ

前回のニューズレターで速読用テキストの原稿を募集いたしましたが、適当な原稿が集まっておりませんので、再度募集いたします。高校生用の易しくておもしろいものがありましたら、9月2日の大会の当日、高取先生か小野にお渡しください。（副会長 小野 昌）

寄贈図書のお知らせ

1. ローレンス・プリングル『動物に権利はあるか』NHK出版、1,400円

本学会会員田邊治子先生（麻布大）の翻訳です。

「本書では、動物の権利についての賛否両論だけでなく、動物権の歴史や哲学について述べ、動物権運動が現在どのようなことに関心をもっているかを明らかにしたい。そして読者がこの厄介な道徳的、倫理的問題への答えを見出す一助となることを願っている。」（本文より）

2. 日本マラマッド協会編『アメリカのアンチドリーマーたち』北星堂書店、2,800円

本学会会員君塚淳一先生（中国短大）が「文無しユダヤ人」――夢を壊すものは何か、貧しき善人たちの選択と子供の目――を執筆されています。

学術委員会から

『英米文化』第26号の原稿の締め切りは10月末日ですので『英米文化』第25号巻末の投稿規定に従って下記宛にご投稿ください。原稿末尾に所属（勤務先）とフロッピーの添付の有無を明記の上、封筒に「英

米文化原稿」と朱書してください。(相良英明)

原稿送付先：相良英明 〒

事務局からのお知らせ

年末の例会（一泊研修）について

英米文化学会では、大会を地方と東京で一年毎に交互に開催する慣例となっております。地方で大会を開催した年度の次の例会は、東京で例会ならびに忘年懇親会を開催し、東京で大会を開催した場合には、東京近郊の宿泊可能な施設にて例会を開催し、夕方から忘年会を兼ねた懇親会を開催することにしております。

今回は大会が東京で行われますので、以下のような次第にて、小田原にての例会となります。日帰りの参加も、懇親会まで（のみ）の参加も歓迎します。勿論宿泊施設がありますので宿泊も受け付けますので、翌日に湘南の海や箱根の美しい山々を楽しみましょう。会員からの強い希望もあって、今回からは相部屋なし、オールシングルの部屋での宿泊となります。ただしツインのシングルユースということで多少高くなっておりますが、ご了承ください。

小田原のアジアセンターの懇親会のお料理の美味であったことは今でも参加者の語り草となるほどですので、宿泊なさらずとも懇親会までは残られるようお勧めいたします。

記

第89回例会のお知らせ

日時：平成7年11月18日（土）から19日（日）

例会は18日の午後3時より「はこね」の間にて開催

宿泊を申込んだ会員の受付は同午後2時より開始

場所：アジアセンター（〒250 小田原市城山4-14-1 Tel 0465-22-6131 次回の会報に地図掲載）

小田原駅（JR・小田急）よりタクシーで5分

費用：懇親会 5,000円 宿泊 9,800円

宿泊・懇親会への参加申込み（例会のみの参加の場合には不要）

同封の葉書にて、9月17日までにお申込みください。お問合せは、事務局、佐藤治夫まで。電話は勤務先直通（03-3219-8160）または携帯電話（030-90-51280）にて。

◆新入会員（住所の左側の数字は郵便番号です）

英米文化学会会報 第24号 編集・発行：英米文化学会編集委員会—池田 和子、小川 喜正、
岸山 聡、武井 朗子、中村 豪、宮崎 敬子、山根 正弘
発行責任者： 中村 豪 〒363 埼玉県桶川市川田谷2509-12